

唯一無二の存在

クラーク記念国際高等学校深川キャンパス 二年 山田 好海

私には大好きな人がいる。それは、八年前に亡くなった母方の祖父だ。

祖父がまだ生きていた頃、私は旭川市に、祖父は稚内市に離れて暮らしていた。祖父は病気をしがちで何度も大きな手術をしたが、何度も元気に回復した。そんなたくましく、優しい祖父が大好きだった。同じ北海道に住んでいても距離があるため、会えるとするれば年に一、二回であったが、祖父に会うことができない時でも、電話をしたり手紙を送ったりしていた。大好きな祖父に、常にそういった形で近況報告などができるのがとても嬉しかった。

母と弟と私の三人で、稚内市の祖父母の元を訪れた事があった。歌が上手だった祖父は、カラオケで歌い方や分からない歌詞などを、優しく、穏やかな眼差しで指導してくれた。毎回、祖父母の家を去るのがとても憂鬱だったし、また何ヶ月も祖父に会えなくなるのかと思うと寂しい気持ちにもなった。

ある日、突然祖父が倒れた。稚内市の病院では手に負えない状態だったため、ドクターヘリで名寄市の病院まで運ばれた。私は、気が気でなかった。その時、そばに一緒にいることができない悔しさやもどかしさを痛感した。

それから、毎週のように名寄市の病院まで母と車で通う日々になった。私は、母と二人きりの車の中でこんなことを言った。

「じいちゃんのところに行って顔を見るまで心配だから、音楽かけるね。」

母はいいよとだけ言い、その後は何も口にすることはなかった。それは、私の不安な気持ちを理解してくれたからだ子どもながらに感じた。

それから月日が経ち、ついに祖父が永遠の眠りについた。私の家族が知らせを受けたのは早朝のことで、私はそれまで寝ていたがすぐに飛び起きた。

稚内市の母の実家に行き、すぐに祖父の葬儀が始まった。祖父は養子としてもらった子どもだったため、親族はいなかった。けれども、とてつもなく人望の厚い人だったため、友人が沢山葬儀に参列してくれ、私はさすがじいちゃんだなと思い、その光景を嬉しく思った。

次の日の最期のお別れの時には、これでもかというくらい泣いた。泣いて泣いて苦

しかった。

祖父が亡くなった数年後、祖母が私の家の近くに引っ越してきた。祖父が亡くなったからずっと一人暮らしをしていたが、高齢であることを考え、何かあってからでは遅いということで母や叔父の近くに越してきたのだ。

その祖母の家に遊びに行ったとき、私はあるものを見つけた。それは、亡くなった祖父が青年時代に書いた小説や詩の数々だった。几帳面に同じサイズのメモ用紙に書いてまとめたものが、しっかりと紐でくくられているのがなんとも祖父らしく感じた。そこに書いてある小説や詩も、読むとすぐに情景が浮かぶ見事な作品で、祖父の経験豊かな人生をそこに見た気がした。一つ一つの作品にはそれぞれ違う絵が祖父によって描かれており、その絵もまた味があって見事であった。その絵の中には、祖母と見たであろう風景が描かれており、祖母との淡い思い出を感じた。

祖母は、その沢山の作品を見て祖父母が若かった頃の思い出を話してくれた。

「じいちゃんね、文学少年で、とても賢い人だったんだよ。でも、ばあちゃんもこんなに作品があったとは知らなかったわ。」

祖母はいつの間にか涙目になっていた。それから、祖母と何時間も祖父の話をした。

祖母がこのようなことを言っていたのを強く記憶している。それは、私が小説や詩を書くのが好きなことが、祖父とそっくりだということ。考えてみると確かにそうだと思った。私は時々、趣味で小説を書くことがある。それを毎回祖母に見せると、祖母がとても褒めてくれるのが嬉しかったのだ。しかし、私は何よりも祖父との共通点があることが、この上なく嬉しかった。

私は祖父との永遠の別れを経験してから、「間」（私はこの漢字を「あいだ」と読む）というものが無くなって欲しいと思っている。祖父はもうこの世にはいないので、会いたくても会うことができない。しかし、私はずっとこの世で生きていかなければならない。「あの世」と「この世」の「間」が無くなればいつでも心を通わせられるのに。

私は、日々を何気なく過ごしていたら考えないような、感じられないようなことを、祖父から教わった気がする。このエッセーも、祖父との「間」を埋めたい気持ちをいっぱいにして執筆した。これは大好きな祖父の存在があったからこそ書けたものだ。

私にとって、祖父は偉大な存在であり、大好きな存在だ。ずっと、これからも。